参 考 資 料

参考資料１　沖縄らしさの表現と景観の見方、捉え方

（１）　沖縄らしさの表現（「沖縄県景観基礎調査」平成５年）

景観形成においては、地域が持つ特性、地域らしさを生かしていくことが基本となり、沖縄においては、他地域とは明らかに異なるこの特性を“沖縄らしさ”と呼んでいます。この“沖縄らしさ”は、亜熱帯の自然の景観と琉球の歴史文化に根ざす伝統的景観、その下で営まれる人のくらしの景観として共感され共有されています。また、これらは相互に関わる景観を生み出し、さらに独自の雰囲気を醸し出す新たな現代の沖縄風の景観を育みつつあります。

島しょ県沖縄の圏域・地域ごとに基調となっている沖縄らしさをあらわす景観の領域があり、そこに共感・共有されている景観特性として確認するとともに、これらを生かして沖縄らしさを発展させていく景観形成の方向を、沖縄の風景づくりの方向として例示しその定着を目指します。

１）　沖縄らしさを感じさせる５つの領域

①自然の姿　環境の基盤や骨格を形成し、生態系地域の空間に秩序や安定感を与える自然や風土の構成要素であり、景観面では遠景～中景～近景を構成します。

②土地利用の姿　人々の長い生活の営みにより自然の姿に刻まれてきた土地の使い方（生産等）をあらわす要素であり、景観面では遠景～中景を構成します。

③歴史文化の姿　人々の心の支えとなる地域のシンボルや歴史的文化的遺産などの要素であり、景観面では中景～近景を構成します。

④生活文化の姿　生活を通して住まい、働き、憩い、学ぶといった行為の中で工夫され形づくられた快適な空間などの要素であり、景観面では中景～近景を構成します。

⑤創造の姿　時代を担う活力や人材、技術など、地域を感じさせる人々の潜在力や可能性をあらわす造形の表現要素であり、景観面では中景～近景を構成します。

自然の姿

土地利用の姿

歴史文化の姿

生活文化の姿

創造の姿

2）「沖縄らしさ」の定義

東アジアに位置する亜熱帯海洋性の島しょ県という自然的・位置的条件の下に、それぞれの地域で長い年月をかけて営まれてきた土地利用や生活（くらし）の姿、またこれらの生活の中で育まれてきた風俗・習慣・行祭事、並びに歴史・文化のあらわれ、さらに地域の風土を生かした新たな価値の創造など沖縄の独自性を強く感じさせる諸相。

3）「沖縄らしさ」の表現

沖縄らしさを構成する領域	沖縄らしさの要素（キーワード）	沖縄らしさの要素を支える圏域
自然の姿 ・地域に固有の自然の様相	強烈な光と影、貴重な水、微地形と緑など サンゴ礁（リーフ、イノー、ヒシ等） 石灰岩の台地、段丘など	県内どの地域でも亜熱帯海洋性の風土と島嶼性は感じられる。 特に本島周辺離島及び八重山圏域は卓越している。 本島内では北部圏域により多くの自然が残っている。
土地利用の姿 ・人々の営みにより織りなされた土地の容貌	耕地や集落を囲む緑 農地の広がり：水田、ターンム畑、サトウキビ、パイン、ミカン畑等 牧野の広がり 緑に囲まれた市街地の輪郭	本島中南部圏域での都市的土地利用、その他の圏域では農業的土地利用が特化している。 サトウキビ畑は全圏域に多い。また水田・牧野は北部と八重山圏域に見られる。
歴史文化の姿 ・地域に受け継がれてきた心のよりしろ	石造文化遺産：グスク、石畳道、石道粉、石橋等 生活文化遺産：御嶽・拝所、墓地、ヒージャー、カー、集落林、チンマーサー、石垣・ヒンプンなど 伝統行事：エイサー、ハーリー、闘牛、綱引き等 東廻り、宿道等歴史的な道筋	歴史文化遺産は全圏域に残存している。特徴的なのは、グスクやヒージャー、石畳道などで石灰岩地域により多く確認できる。 伝統集落は本島北部、周辺離島、八重山の各圏域に多く見られる。
生活文化の姿 ・地域に根付いた暮らしの表情	賑わいの場：市場、広場、通り等 伝統工芸・特産品：紅型、餅、漆器、陶器、泡盛 家屋形式：赤瓦、シーサー、等	生活文化の発信地となる市場などの賑わいは本島中南部によく見られる。
創造の姿 ・地域を生かす新たな価値の創造	花と緑豊かなリゾート地・街並みの賑わい：大学、コンベンション等 ゲートやアプローチの雰囲気：空港、港、道路等 花と緑の公園・緑地、風格のある並木道、広幅員の歩道 水辺の潤い、護岸等の試み 景観と調和ある建築物等	あらゆる景観構成要素が量から質への転換を求められており、都市部を中心に様々な取り組みの事例が見られる。 特に、本県は島嶼で成り立っており、島々のゲートやアプローチでの景観形成はどの圏域でも重要な課題となっている。

（２） 景観領域を構成する景観の原則と景観の脈絡を認識する景観の特性

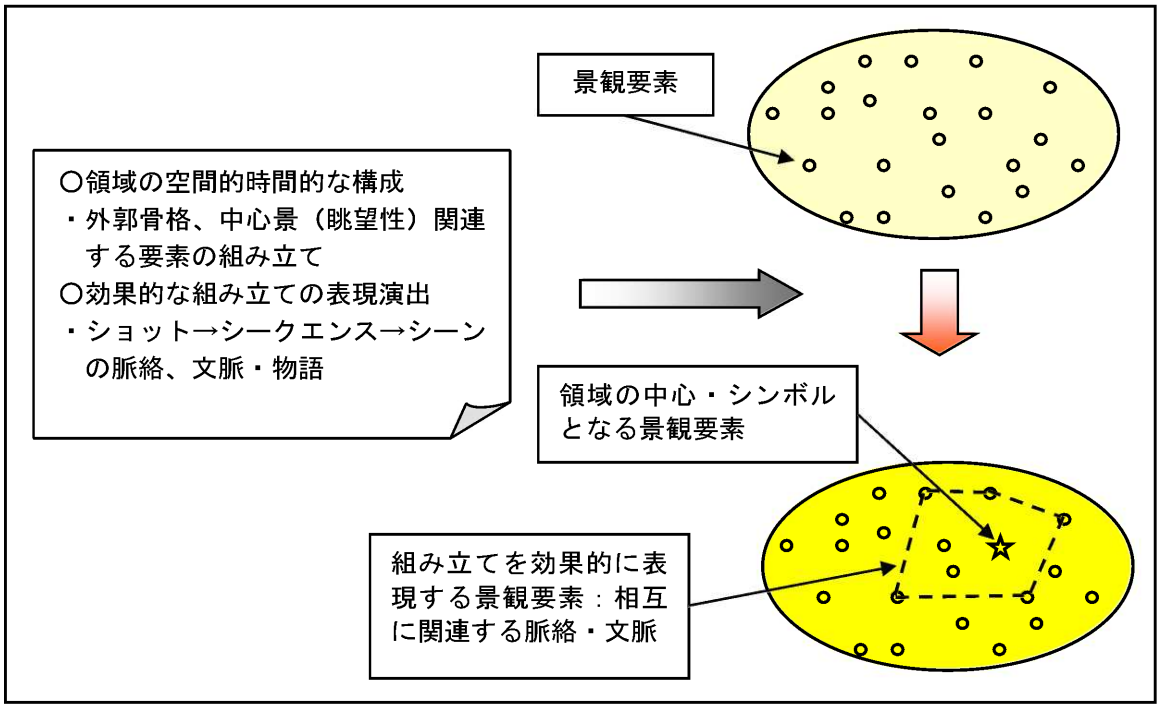
沖縄県を構成する圏域では、それぞれの立地や自然、歴史文化の特性、社会の特性に応じて、５つの景観領域の何れかが主になって、そこの景観の基調を形成しています。

県民の認識をアンケート（平成 18 年度実施）に見れば「身近に大切に残したい景観」として、自然や歴史文化などに関する回答が多く見られ、全域を通してこれらの存在の重要なことがわかります。また都市地域では幾つかの景観領域が関わって景観を形成する一方、景観の構成要素が多く失われ、あるいは埋没し忘れられている状況なども窺えます。

従って、景観の基調を確認する上では、景観の空間的な構成を原則として理解するだけでなく、時間的な存在状況、すなわち往時の空間構成や景観の構成要素とその脈絡にも留意して、今日の状況を捉えその顕在化と再生にも目を向けた景観形成の方向に配慮していく必要があります。

景観の構成については、その地域の中心あるいはシンボルとなる景観要素は何か、またそれを支える景観要素は何かなど、その空間的特性を確認するとともに潜在するこれらの往時の状況（時間的構成）にも留意して、領域の景観の基調（シーン）と、その景観要素・場の景色（ショット）、これらの空間的時間的なつながりの景色（シークエンス）の関連を、景観の脈絡として理解した上で、個々の形・姿の調和や個性の発揮について評価していく認識のプロセスが重要になります。そこには人の営み人の歴史があり、時空を通した様々な物語（エピソード）が内在しています。広く共感・共有を得る景観はこのような共通認識の下で存在していると言えます。

現代の風景づくりにおいてもこの領域の“基調”や“脈絡”を生かして物語を生むような景観形成が必要であり、そこに共感を広げ価値が共有される景観が育まれていきます。



＜ 「“美ら島沖縄”風景づくりのためのガイドライン」
（平成 19 年内閣府沖縄総合事務局） **の構成と目的 ＞**

０１ 総論：「現代の沖縄風」を目指して・・・基本理念の確認

（目次）

総論「現代の沖縄風」を目指して

０１－０１ 沖縄らしい風景づくりの視点

① 一括りにできない「沖縄らしさ」

② 無秩序に使われてきた「沖縄らしさ」の表現と「地域らしさ」が反映されない沖縄の風景

③ 沖縄らしく美しい風景と新たにつくられてきた沖縄の風景

④ 地域の一貫した取組みと、調和のとれた風景が主役であることの認識

０１－０２ 沖縄の風景づくりの基本

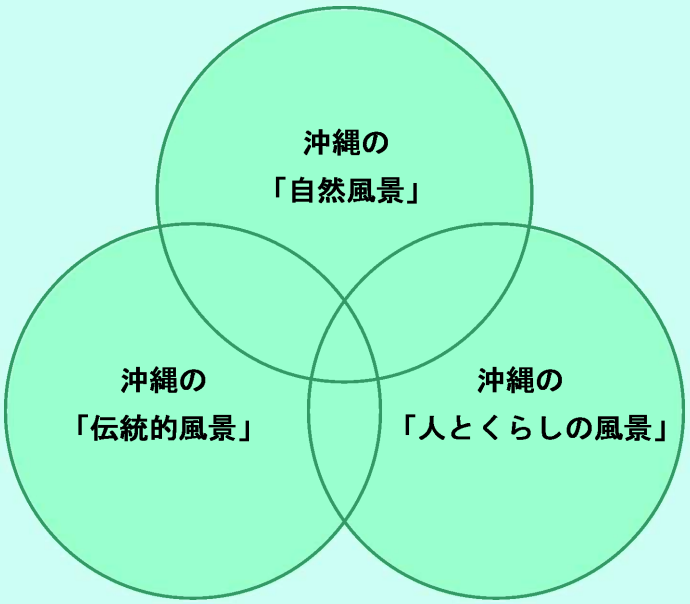
① 沖縄の「自然風景」（Keyword）多様な自然、恵みの風景、恐れの風景

② 沖縄の「伝統的風景」（Keyword）希少な風景、現代にも生きる風景

③ 沖縄の「人とくらしの風景」

（Keyword）亜熱帯特有の環境と共生するくらしの知恵、生き生きとした営みの風景

＜沖縄の風景づくりの基本＞



０２「沖縄らしい風景」の個性と多様性・・・個性と多様性の確認

（目次）

０２-０１　沖縄の「自然風景」

① 変化に富んだ沖縄の自然風景

② 多種多様な自然素材

③ 沖縄の自然と人々の関わり

０２－０２ 沖縄の「伝統的風景」

① 沖縄の伝統的風景を振り返る

② 沖縄の伝統的風景を今に伝える素材や工法

③ 沖縄の伝統・文化と人々の関わり

０２－０３　沖縄の「人とくらしの風景」

① 沖縄の現代風景を振り返る

② 新しい素材や工法

③ 現代の沖縄文化と人々の関わり

０３「現代の沖縄風」実現に向けて・・・「現代の沖縄風」の実現のために重点的に取り組むべき事項の整理

（目次）

０３－０１　沖縄を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり

① 観光リゾート

② アーバンリゾート

③ ウォーターフロント

④ 夜景の演出

０３－０２ 生き生きとしたくらしの中の風景づくり

① マチぢゅくい(都市)

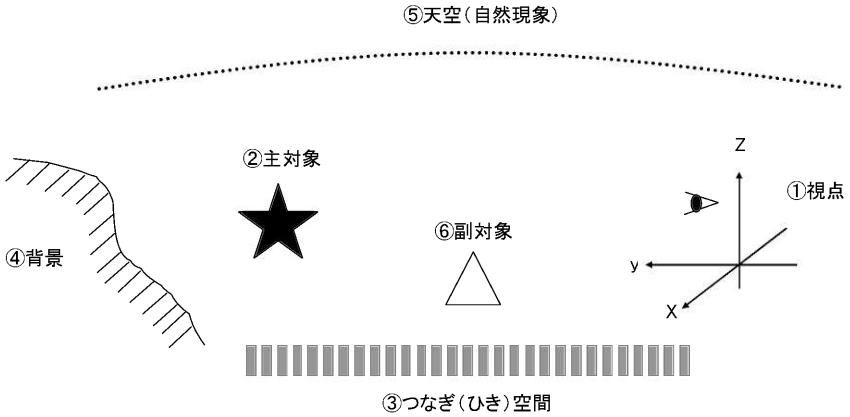
② シマぢゅくい（集落・地域）

沖縄らしい風景づくりの継続的な実践

（３） 景観の見方、捉え方

景観は景と観（る）の関係を表します。それは一定の領域（広がり）の中に存在する景観要素（景観資源）とその構成（まとまり、つながり）を体験する（観る）ことによって認識されます。東京工業大学名誉教授の鈴木忠義先生は、景観の要素と構成について次のように論じています。『景観の要素と構成としてまとめた下図において、最も大切なのが「視点」で、目は上下したり、近づいたり離れたり、横に移動したりします。視点の設定は非常に大切です。そして、何を見ているのかというのが、「主対象」です。それから「つなぎ（ひき）空間」。そして「背景」も大切で、肖像画などは「背景で描く」と言われるくらい背景に気を使います。そして、「天空」の状態は天候や時間で変化します。そして「副対象」は足元をどう操作するかということです。これらの要素をどう組み合わせ、統合していくかが問題となります。』　（出典 「にいがた景観まちづくりフォーラム みんなでつくる美しいまち　平成20年３月　新潟県）

いい風景、よい景色とは、これらの景観の構成の良好な関係の基に、特定のエリア（風景地）を形成するよう、場（資源）の個性（地域性）が発揮される状態を言います。景観は次第に変化していきます。従って、景観を捉える上では、現存する価値を明らかにするだけではなく、その再生・創出にも期待し、変化が景観の質を高め（修復し）地域の価値となるよう、地域が育んでいる景観の個性やその土地らしさの象徴的な表現を捉えていくことが必要です。



○景観の要素と構成

①視点

1）水平移動	x 軸	
2）距離の変化	y 軸	遠近
3）垂直移動	z 軸	自然―丘、山　人工―展望台、ビル

②主対象

1）周辺との関係　景観の構成：消す、調和、強調、・・・群景と単景
2）橋のある景観　橋の姿、橋の構造
3）色と形
4）視線の選択（見せ場）　仰角⇔俯角（伏角）（ティルト）
左右への広がり（パノラマ）

③つなぎ（ひき）空間

1）水平（パン）と垂直（ティル）と額縁（キャノピー）　展望景観
2）視野とひき
3）俯角（伏角）と仰角　浮世絵の構造から学ぶ
4）テクスチャー　水面（水鏡）、農耕地、地形、点描と花密度

④背景

1）単純化　雪景、夜景、素材の均一
2）風景　肖像画における風景の登場
3）異物　二重橋と電波塔は合わない（今は鉄塔がなくなった）、
顔に墨を塗る

⑤天空（自然現象） ～変化と多様性

1）四季　　季語
2）天候　　空、風、雨、雲、霧
3）光線　　朝、昼、夕、夜
　　赤富士、ダイヤモンド富士
　　順光、逆光、トップライト ・・・ 照明術

⑥副対象（視点場）

1）遮蔽、見切り線、借景
2）絞り
3）見透線 ・・・ 焦点の強調
4）近景（中景・遠景）
5）点景・添景

○景観のいろいろな構成

形態・色彩　緑、水、光、音、香、味、心 ・・・
景観 ― 風景 ― 情景
静景 ― 動景

参考資料２　沖縄の風景の変遷と風景論

（１）沖縄の風景の変遷（琉球王朝時代～現代）

沖縄らしさは、亜熱帯海洋性の自然風土と島しょという立地特性のもと、長い歴史の中で培われてきた生活の姿であり、各国各地との交流によって方向づけられ育まれてきた社会の姿であります。ここでは、琉球王朝時代から現代までの風景の変遷を振り返ってみます。

１）琉球王朝時代（15 世紀前半～明治 11 年）

第一尚氏王統が確立し、まず首里城や龍潭の整備がなされ、やがて第二尚氏王統の尚真・尚清王の代に王城内外の整備が一段と進められ、16 世紀半ばには王国の首都の姿が整いました。今は、復元された首里城周辺などをはじめ、首里金城町の大アカギ、石垣道など、琉球の王城と城下町のたたずまい全体に沖縄の伝統的風景の原点を見ることができます。

ペリー来航当時の那覇の街
（ペリー提督日本遠征記）

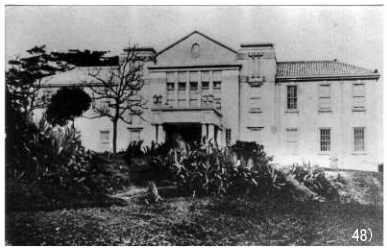
首里城正殿

２）近代（明治 11 年～戦前）

廃藩置県により、沖縄県が誕生し、政治経済の中心は、首里から那覇へ移りました。明治政府の近代化政策により、風景に大きな変化が起こりました。公共建築は、大正年間に鉄筋コンクリート構造が導入され、台風や白蟻対策として多く採用されました。

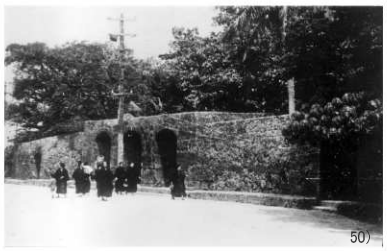
首里城から見た三箇

茅葺屋根の民家



沖縄県会議事堂

泉崎大通り



崇元寺石門前

沖縄県庁舎

３）米軍統治期（戦後～復帰前）

那覇市国際通りには、デパートや個人商店、映画館などが建ち並んでいきました。国際通り周辺は、経済・商業の中心地であり、戦後復興の象徴にもなりました。しかし、急激な都市化が進み、狭小な街路、公園緑地の不足などの都市計画上の問題や、スプロール化が深刻なものとなりました。経済振興とともに、まず木造瓦葺きが広がりましたが、やがて、アメリカから輸入されたコンクリート住宅が、沖縄の気候条件にも有利であることから、速いテンポで普及していきました。屋根形状も陸屋根と小屋組みの寄棟屋根が混在するようになりました。

平和通り（1950 年頃）

ゲート通り（旧コザ市 1956 年頃）

米軍人住宅（旧真和志市）

国際通り（1960 年代初期頃）

国際通り

県庁周辺

４）現代（復帰後～現代）

1972 年の本土復帰後、社会資本整備が進められ、中心市街地においては建築物の高層化、巨大化、周辺地域の市街地化が進み、返還された基地跡地の多くが新しい市街地に生まれ変わりました。那覇新都心地区では、職住が近接した商業・業務用途と住宅用途が共存する中高層の共同住宅が多く立地しています。また、行政施設や文教施設といった公共建築物、さらにはリゾートホテルなど多数の大型建築物が整備され、住宅においては勾配屋根に赤瓦の伝統様式を取り入れた RC 建築物の普及や本土からプレハブ住宅が移入されるなど、住宅様式の多様化が進みました。

（２）識者による沖縄の風景論

首里城を訪問するペリー提督一行
（ペリー提督遠征記）

那覇の港に船が入ると、そこには美しい景色が展開される。海岸から山の頂上までゆるやかに登る斜面の全てが完璧なまでに田園化され、冬の作物が緑の濃淡の影を与え、一様に広がる段々畑の山々と所々に忘れられたかのように点在するこんもりとした大木の樹木が田園風景に命を与え、美しい森を形成している。

水平に延びる遠方の山々の頂には裸の幹の上に優しく枝を伸ばした琉球ならではの松の木が生い茂り、その松の枝葉から陽射しがこぼれている。これら全てがこの世の中で最も豊かな田園風景を創り上げているのだ。

ペリー提督遠征記の第２巻（1854 年ジェイムズ・モロー評）より

緑したたる街並み、見晴らしのよい丘、こんもりと繁る木立、どれをあげても首里の都は世界一美しい。士官たちは首里に登るといつも無情の喜びにひたる。手入れの行き届いた泉で喉の渇きを癒し、雲つく大樹の陰でピクニック気分。その気になれば昼寝だって楽しめる。昼のうたた寝が終わると鬱蒼たる樹木に囲まれた泉で水浴びを楽しむ。ここが、アメリカならいったいどれだけの価値があるやら見当もつかぬ。あの伝統の国イギリスでさえ、こんな古色蒼然たる自然の庭園は持ち合わせていないのだ。

スポールディング航海記（1853 年）より

首里は、丘の上にある。

戦前、首里の旧王城がいかに美しかったについては、私はまったく知らない。沖縄の文化財の権威である山里永吉氏については、私はその著作物を通じてしか知らないが、その著『沖縄史の発掘』によると、氏が戦前、陶匠の黒田理平庵に奈良の町を案内されているくだりがある。そのとき、氏が、「やはり首里がよいな」というと、理平庵は、「首里は格別ですよ」といった、という。氏によれば、「もし首里の街が戦前のままそっくり残っていたら、沖縄は京都、奈良、日光と肩をならべる観光地になっていただろう」と言われる。

首里の石道（戦前）

糸満という、日本でもっとも個性的な漁港に来ながら、港や船よりも陸の家屋群に気をとられているようだった。例の赤レンガ色の瓦を太いシックイでとめた屋根が、小路をのぞくと、ずっとむこうまでならんでいる。その赤い琉球屋根が、沖縄本島のどの村や町のそれよりも、ここでは海の青さのせいか、ずっと美しくみえる。

集落（竹富島）はじつに美しい。本土の中世の村落のように条理で区画され、村内の道路はサンゴ礁の砂でできているために、品のいい白味を帯びその白さの上に灰色斑ともいうべきサンゴの石垣がつづき、そのぜんたいとして白と灰色の地の上に、酸化鉄のような色の琉球瓦の家々が夢のようにならんでいるのである。

竹富島集落内（竹富町）

沖縄・先島への道　街道をゆく 6　司馬遼太郎（1978 年）より

首里士族屋敷の屋根門（戦前）

観光、観光、といっているくせに沖縄ではあまり観光資源が大切にされていない。観光客を誘致してさてなにをみせようというのだろう。なるほど沖縄は海の色も美しいし、空の雲も美しい。しかし、観光ということは、なによりもその国の固有の文化をみせることに意義があるのであって、遊ぶことだけなら、世界のどこの国に行っても完備した遊園地がある。私は、よくいうことだが、もし首里の街が戦前のままそっくり残っていたら、沖縄は京都、奈良、日光と肩をならべる観光地になって交通機関が便利になった今時、おそらく日米の観光客が洪水のように流れ込んできていただろう。首里の街の美しさは、ちょっと他に類のない美しさであった。

沖縄史の発掘　山里永吉（1971 年）より

波照間島集落内（竹富町）

特定な作者、だれが創った、はない。島全体が、歴史が結晶して、形づくったのだ。たとえば石垣は、周期的に襲ってくる台風に根こそぎもっていかれないため、どの家のまわりにも積み重ねられている。石積みの技術、ていさいなんて問題じゃない。石は不揃いだし、てっぺんはボコボコ。幸い珊瑚礁の石はギザギザで、無造作に積まれていてもがっしりと安定している。身を守る手段として、美しさ、みえなど考えてもいないのに、結果は美しいのだ。いや偶然ではない。生活の必然から、あたかも自然そのもののように出来上がってしまったからなのである。
たまたま内地から民俗学者とか芸術家などが来て、これは大変美しいなんて感心する。沖縄でも文化人は、郷土の伝統美として保存したいなどと力んでいるが、島の人たちは、へえ、こんなものがね、というわけだ。

忘れられた日本　沖縄文化論　岡本太郎（1996 年）より

写真提供・出典一覧

● 枠内の番号は、掲載写真右下の番号に対応しています。

財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団

1)，4)，5)，7)，8)，9)，13)，14)，32)，40)

財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー

2)，6)，7)，15)，16)，17)，18)，19)，21)，22)，23)，26)，27)，28)，29)，30)，34)，36)，37)，38)，41)，61)，64)，65)

社団法人 那覇市観光協会

31)，42)

社団法人 宮古島観光協会

24)，25)

独立行政法人 沖縄科学技術研究基盤整備機構

63)

那覇空港ビルディング株式会社

3)

沖縄コンベンションセンター

20)

万国津梁館

11)

那覇市歴史博物館

44)，45)，46)，47)，48)，49)，50)，51)，52)，53)，54)，55)，56)，57)，59)，60)，62)　※ 53)，55)，56) については、キーストンスタジオ提供那覇市歴史博物館蔵

内閣府沖縄総合事務局 農林水産部土地改良課

10)，12)，35)

沖縄県立図書館

15)，33)，39)，43)，58)

写真提供（その他）

那覇市、渡名喜村、伊平屋村、南城市、沖縄市、宜野湾市、国頭村、本部町、金武町、八重瀬町、読谷村、うるま市、浦添市、伊江村、粟国村、石垣市、竹富町、大宜味村

田畑 正敏 氏（前 内閣府沖縄総合事務局開発建設部 公園・まちづくり調整官）

“美ら島沖縄”風景づくり計画 （沖縄県景観形成基本計画）

平成 23 年 1 月

沖縄県 土木建築部 都市計画・モノレール課
〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎 1 丁目 2 番 2 号
TEL 098-866-2408 FAX 098-866-5938
E-mail aa065005@pref.okinawa.lg.jp